

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 712 号] 2021 年 10 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.712

October 2021

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## カンタータ 78 番からの恩恵——聴く、歌う、作る

松尾 茂春 (団員)

名曲「カンタータ 78 番」に魅せられた方は数多く、皆様それぞれに豊かで多様な観点からの思いを持っておられることと思います。私もその 1 人として、自身の思い出を重ね合わせながら記させていただきたいと思います。実は、カンタータ 78 番は私にとって特別な作品で、それは「聴く」、「歌う」、「作る」この 3 つの観点それぞれから自身の音楽感を揺るがし、新たな方向を導いてくれた作品です。それを語るにあたって私事で恐縮ですが、子供の頃からの体験まで遡ったうえで、その後そこにどういう影響があったのかを記したいと思います。

「聴くこと」—— クラシック音楽ファンだった父の影響で、日々名曲のサウンドを浴びる中、「聴く」ことは大好きで、ごく自然にクラシック音楽を聴き、小学 5 年の時に「音楽には流行ってすぐに飽きられ忘れられるものと、いつまでも残るものがある」と生意気な確信を持ちました。ただその時期にまだバッハ作品からは遠くあったのですが……。

「歌うこと」—— 合唱はいつも楽しい時間でした。また小学 4 年の頃に行った家族旅行で、夕暮れ時に母と富津の岬の先まで往復しながら、知っていた歌や教えてもらった歌を口ずさみながら砂浜を歩いたことが「歌う」ことへの好感の思い出としてあります。

「つくること」—— 小学校で音符の読み書き習ったので、たまに紙に絵を描いたり、言葉を綴るのと同じように、思いついた旋律を書きとめることは時折ありました。しかし当時は、旋律自体の情緒、大まかな和音、オーケストレーションといった面への興味が主でした。その後は高校でバッハの器楽作品の一部を課題としてアンサンブルした際に、上声に対峙して動くバスに構造的な面白さの一端を垣間見る程度でした。

進路を理系に定めた後の大学受験時期、地元の杉並区高円寺商店街にある古書店に入った折、分類なく雑然と並べられた古書の中にあつた和声法の本に目が留まり、興味をそそられつつも購入までの決心はつかず、店に通って立ち読みを重ねました。それまで作曲と言えば旋律+和音、せいぜい対旋律の付加といった枠で

しか捉えていなかった私にとって、それは多声部構造への興味の第 1 歩となり得るものでしたが、当時の意識としてはあくまで曲を（たとえば讚美歌を多声部で歌いやすく）整える手引書といった意識程度で頭の片隅におかれたままでした。

大学入学後、同じ物理学科のクラスに「バッハの音楽に傾倒している」旨を前面に打ち出して自己紹介して来た人物がいました。ヴァイオリンでシャコンヌ (BWV 1004 の 5 楽章) を弾きこなす一方、上野の文化会館資料室に通って既にバッハの現存するすべてのカンタータを聞き比べたという強者の彼に、ほどなくバッハ指南を受けることとなりますが、その時貸してもらった一連のレコードの中にあつた 1 曲がカンタータ 78 番だったのです。それを聴いて強く心に響き、2 系

統の刺激を受けました—— “右脳的” には「なんと深く美しい曲があるのだろう」、 “左脳的” には「なんと見事な音の構造なのだろう」。これが「聴く」ことへのバッハ・ショックでした。

その後、一般教養科目の宗教学の単位取得の一つとして履修した「グレゴリアン / バッハ コース」では、なん

とその BWV 78 が教材の 1 つとなっていました。授業中にコラール楽譜（訳者不詳ですが日本語歌詞付）が配られ合唱——これが「歌う」ことでの初バッハ体験となります。それまでに歌って来た合唱曲と言えば、授業での簡素な合唱曲、コンクール出場する合唱部へ応援参加した際の邦人合唱組曲、教会聖歌隊で歌う主に 18-19 世紀英米系讚美歌等、いずれも多くは縦割り構造でした。

こういった経験からバスは建築の基礎のごとく、黙々とハーモニーを支える脇役、といった先入観があつたのですが、それが打ち破られ、バスが雄弁に曲を進めていく魅力を知る第 1 歩となります。譜面上動きが歴然とわかる第 1 曲などに比べると、コラールは一見、4 分音符中心に音符が単純に連なるだけのように見えますが、実はその場合でも各声部、特にバス・パートの旋律性は見事に考慮されています。その大切な



■秋の花・コスモス (写真: 千葉光雄)

### 月報 2021 年 10 月号 CONTENTS

- ・連載：退屈するのはいそがしい [8] (大野博人) …p. 4
- ・柔らかな体で戦争導入を防ごう (大村恵美子) ……p. 3

事がわかり、“合唱感”が変わりました。これはバッハを歌ってみたいという気持ちを生み、やがて東京バッハ合唱団に入る機会を得て、究極の生きたバス・パートを有する第1曲も歌うことに繋がります。

さてBWV 78 との出会いは「つくる」観点でも大きな示唆を与えてくれました。大人気の第2曲のS/Aデュエットや故・磯山雅氏が衝撃を受けたと言われる Tレチタティーヴォなどの素晴らしさは言うまでもないのですが、すでに多くが雄弁に語られているので、ここでは当時、最初に驚いた第1曲（冒頭合唱）と最終コラールを取り上げます。

#### ◆第1曲 合唱について

すでに月報 710 号で詳細に解説されていますが、コラール旋律を拡大して定旋律としてソプラノに配置し、他の声部が相互の模倣を伴って掛け合うように進行する様式に加え、主音から属音に下る主題を主にバスに配置したシャコンヌ形式ともなっている、雄大かつ精緻極まりないこの作品を知った時、そのバスの半音階下降とその上に配置された和声の絶妙な遷移に「あっ、こういう手があったのか!」と驚き喜びました。実はそれまで半音階の動きと言えば、全音階の間を経過音などの非和声音（自身は和音に属さない音）で繋いだものといった認識しかなかったのですが、ここでは一つ一つが和音に組み入れられ、しかも一つ進むごとに和音の長/短が刻々と入れ替わることで、繊細な色合いを醸し出しています。青空も雲もある空の下、日が差したかと思うと陰り、陰ったかと思うと日が差すような天候、あるいは喜びの向こうに悲しみが、その向こうに喜びがあるような人生模様を思わせます。このように刻々と変化する和声の妙、さらには全てのパートが自立して有機的に動きながら全体で調和するような音楽構造の妙に私の興味はシフトしました。その結果、同じ和音が延々と冗長に引き延ばされる中に音が乱れ飛ぶような構成の作品や、演奏効果のために構成音の時間軸での綿密な繋がりを欠いた分厚い和音を打ち鳴らすタイプの音楽への興味は薄れてしまいました。

#### ◆第7曲 コラールについて——和声進行のアイデアの泉

一見して単純そうで、通常、楽曲解説では1行足らずで終わるのが常なのがコラールですが、私にとってこれは和声進行のアイデアの泉でした。以前古本の立ち読みで始まった和声に関する知見だけからは、規則に沿って禁止事項に抵触しない範囲でソツなく多声部楽曲をつくるに留まってしまうのに対し、この秀逸なコラール和声は「ここはこうすれば素敵になるよ」ということを極上の事例として導いてくれます(\*1)。

その中からごく短い1点だけ取り出して、ご紹介したいと思います。それはコラールの11小節目の最初の3つの音であるB-C-Dへの和声です。g-moll(ト短調、ただしこの部分では変ロ長調)なので階名として見るとド-レーミ、基本の基本です。「ドレミの歌」はもとより、チャルメラの冒頭も、チューリップの歌も果ては

《ロ短調ミサ曲》の終曲の冒頭までこの階名で始まりますが、たったこれだけに対する和声だけでも可能性は多岐にわたります。ごく単純な和音を使う範囲で例示、比較してみました。



#### ・譜例A:

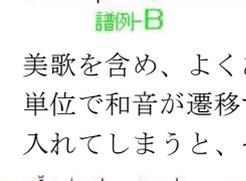
単に左手で押さえやすい和音を拾っただけの手抜き、論外。幼稚園児のピアノ練習には使える。



#### 譜例-A

#### ・譜例B:

全体で和音としては主和音のみ、2音目は経過音として流れの中にあるだけ。同じ和音が1小節あるいはそれ以上続くタイプの楽曲では定番。多くの合唱曲、英米系賛美歌を含め、よくあるパターンです。ただし原則1音単位で和音が遷移するタイプのコラール和声にこれを入れてしまうと、そこだけ様式感が異質になります。



#### 譜例-B

#### ・譜例C:

譜例Bと同様、経過音を含みますが、終始短調として扱った場合の例です。



#### 譜例-C

#### ・譜例D: (誤り例)

古典的な和声の枠組みに収める場合には誤り、規定から逸脱しています。1~2拍目にかけてソプラノとバスが完全5度の関係のまま移動する結果、一瞬一瞬の響きは綺麗でも、全体として気持ち悪くなります。専門家でも時に見落としがあるようです(\*2)。



#### 譜例-D

#### ・譜例E:

1音ごとに和音を変え、それぞれ基本形(3和音の第1音をバスに配置)にした形。これは響きの安定がよく、ハーモニーさせやすく、教科書通りで、和声の落とし穴にはまるリスクも少ない一方で、甚だしくつまらない。個人的には大嫌いです。



#### 譜例-E

#### ・譜例F:

1音目を短3和音にした分、譜例Eより味がありますが、フレーズの途中で使うと動きがギクシャクします。



#### 譜例-F

#### ・譜例G:

1音目を第1展開形(3和音の第3音をバスに配置)にして変化を持たせた結果、バス・パートは多少ましになりますが、まだギクシャク感があります。



#### 譜例-G

さて、バッハはどのようにしたのでしょうか? 上記のどれでもなく、次の様でした。

#### ・譜例H: カンタータ 78 番での和声 [11小節目]

## 柔らかな体で戦争導入を防ごう

大村 恵美子 (主宰者)

第710号(2021年8月)の月報で、大野博人様が「都会での生活は〈覚悟〉だらけ」と書いておられました。私は、東京の生活のほかはほとんどしたことがないので、よく分かりませんが、日頃、電車の中などで、振動のせいで近くの人にぶつかると、その立っている人の体がとても硬くてはね返されそうになることがあります。私は、ずいぶん緊張して立っているものだなあ、と驚くほどです。

大野様の文章内の〈覚悟〉も、〈緊張〉につながるかもしれませんが、やはり都会は極端に人口が多くて、とてもボケーッと生きるわけにもゆかないのでしょうか、その中でも、対人的に「かまえ」ている人と、「相手はどう出るのか」というふうに、ゆとりをもって相手を眺める人と、いるようです。

私は、人と対するときには、自分の体を柔らかくして無心の状態にするようにしています。衣服も、どこか締めつけるところがあったり、露出しすぎて、わずらわれないようにと、なるべく具体的に無難な意識で外出できるように心がけています。当たり前のことですが、まず体に負担があると、心も自由でなくなり、相手の人間との交渉の前に、自分の中でごちなさが生まれるものだからです。

芸人のような人達で、人目をどんなにしていでも引きつけたいのが商売なら、普通の人の生活とは逆のいでたちとなるのでしょうか、私は、自然な関係で交流したいのなら、とにかくどんな相手でも受け入れられるように、体を柔らかく、肩の力を落として、迎えようと思っています。自分の体全体が解放されると、心も自由になって、片寄らずに相手の人間の在り方が目に入り、判断も率直に出来るのでしょうか。

世の中は、いろいろな偏見、憶測、打算などにとらわれて、個人は、世の強い意見になびきそうになりますけれど、公平な立場に自分を置いてすごしたいと願う人なら、世論の動向を追って右往左往するのではなく、自分自身の体を信じて、体が自由を感じられるような状態でものごとを見つめてゆきたいものです。

国が安定し、豊かにもなってくると、外交関係に、どこからか「戦争」の勢いが生じてくるのも、やはり一個の人間として、柔らかな体を維持しようとしなからんのでは——そんなふうに思えるのです。大衆迎合になだれ込みやすい、私たち日本人の危険性を、打破しなければ、なかなか現代人と言われたいのではないのでしょうか。

(2021年8月15日、日本敗戦記念日に)



譜例H

階名でド-レ-ミと上昇するソプラノに対し、バスはミ-レ-ドと逆行しメロディックな動きをします。1音目に第1展開形、3音目に基本形、そして2音目にはⅡの和音(階名でレ-ファ-ラ)が来ます。その前後が長調系である中に短三和音が現れることによる一瞬の陰りと明るい主和音Ⅰへの回帰が美しい。

さらにその2拍目の後半、アルトだけが8分音符でG-A(階名でラ-シ)と旋律的に動きますが、このAはGからBへの経過音としてとれる一方で、和声音として捉えた場合は2拍目後半がⅦの和音(階名でシ-レ-ファ、減3和音)の第1展開形(階名でレ-ファ-シ)ともみなすことができ、それは続く3音目の基本形Ⅰへ誘う和音となります(\*3)。この一瞬の表情の変化に気が付いた時、楽譜を見てその細やかな音使いに感銘しました。たった3つの音への和声の中にも作曲者の才能と良心が投影されていると感じたのです。



譜例I

### ・譜例I：カンタータ 78 番での和声 [14 小節目]

その先 14 小節目には旋律に同じ動きが出てきますが、そこでは一旦転じた変ロ長調からト短調に復帰する過程として今度はこのような和声が付けられています。これも心に沁みる素敵な響きですね。

その後、入団したバッハ合唱団での活動を通して幾多の名作を知るにつれ、バッハの作品そのものが最高の教科書であると確信したのでした。以来、「聴く」、「歌う」、「作る」の全側面において、バッハ作品と東京バッハ合唱団の活動を通して豊かな音楽の恵みを受けられることは本当に幸いです。[ア]

\*1) コンピューター・プログラミングを経験された方はわかるかもしれませんが、そのプログラミング言語の文法書だけでは難しかったことが、簡潔で優良なプログラム事例があると理解しやすく、また良いプログラミングへの道しるべとなるのに似ているかもしれません。

\*2) たとえば「讚美歌 21」の中にもこれに類する不整合のあるものが少なくとも3曲(26番、541番他)あります。日本の唱歌等の合唱編曲でプロの作曲家(?)による市販された楽譜にも怪しいものが散見されます。「バッハはこのような誤りをしない」と思っていたのですが、ある本によれば幼き日のメンデルスゾーンがブランデンブルク協奏曲の中に1箇所誤りを発見し、大喜びして手紙に記した記録が残っているそうです。

\*3) これと同様な和声はモテットⅠ(BWV 225)の第2曲のコラールでも見られます。一方、そのコラールの同様な旋律の始まり方をするジュネーヴ詩編歌(「讚美歌 21」では24番)への伝統的な和声では譜例Fのパターンになっています。

[筆者・松尾茂春氏作品『キラキラ星変奏曲 ～主題と1+40の変奏で歌いつづるイエス・キリストの足跡～』を、来年の特別演奏会で取りあげる予定です(日時会場等、詳細未定)。ご期待ください]

## 不要不急？

安曇野閑人 大野 博人

パリに留学していた35年前の冬のことだ。

カルチエラタンの小さな教会でのコンサートに出かけた。プログラムはバロックの室内楽。開場時刻にはもう日が暮れていた。

チケットを買おうとして驚いた。教会入り口の受け付けに張り出されていた手書きの料金表に、一般の入場料のほかに「失業者無料」とあったからだ。

学生や子供のための割引なら日本にもある。けれど失業者無料は聞いたことがない。

教会の暖房はじゅうぶんにはきいていなかった。会場の後ろの方に座った私は、コートを羽織ったままバツハに静かに耳を傾ける人々の背中を見ながら、「失業者無料」について考えていた。

たしかに当時のフランスで失業率は高かった。その支援は、政治と社会にとって重要な課題だった。しかし経済的な支えだけで、人々の不安が消えるわけではない。

仕事はいつ見つかるかわからない、自分自身で家族を支えられていないという引け目もつもの。心にのしかかる憂いをひとときでも忘れようと音楽を聴きに来る。そして、それを若い音楽家たちが「無料」で迎える。

音楽は、余裕のある者が余裕のあるときに楽しむ、不要不急の「ぜいたく品」という発想は、演奏する側にも聴く側にもない。芸術や文化は、苦境にある人にこそ届かなければならない。そんなことに今さらながら気づかされた。

「失業者無料」は、このコンサートだけではなかった。映画館や美術館でも見かけた。

たとえばルーヴルの料金表には、常設展や音声ガイドなどの一般料金のあとに「入館無料」の項目がある。その対象者には、「18歳未満」や「障害者とその付き添い」のほか「失業者」「生活保護受給者」も挙げられている（写真参照）。

8年前、このことについてルーヴルで取材をした。当時の副館長によると、無料にしても生活に苦しい人の来館がそれほど増えるわけではないという。

「貧しい人たちが来ないのは、お金の問題だけではありません。恥ずかしいという気持ちや芸術作品への気後れもあります。無料にするだけでなく、こちらから迎えに行かないと」

だから、市民団体などと連携して、移民が多く貧しい地域の住民や学校の生徒たちをバスを仕立てて連れてくる活動もしている、と話していた。なにもしなくても大勢が押しかける世界的美術館が、なぜそうまでして無料の入館者を増やそうとするのか。



■ルーヴル美術館入り口の料金表。失業者も入館無料の対象になっている

「美術館に足を運ばなくても生きていけます。でも自分が、ある作品に感動した多くの人たちのひとりだと感じる。それは、同じ共同体に暮らすひとりの市民だと感じることに通じます」

「失業者無料」という発想の根底にあるのは、困窮する人への同情ではない。市民同士の連帯感の表明だ。

コロナ禍に見舞われて以来、世界中で多くのコンサートや演劇が中止を余儀なくされている。私が住む長野県でも最近、楽しみにしていた東京バツハ合唱団の小布施公演やセイジ・オザワ松本フェスティバルが中止になった。

感染防止という事情からやむをえないとしても、中止は音楽が不要不急であることを意味しない。コンサートが人々の連帯をもたらす役割を担っているとすれば、むしろ今ほど、それが求められている時はないのかもしれない。社会の分断はコロナ禍の前から深刻だっただけに、なおさらだ。

こここのところ、感染防止対策をとりながら開かれる演奏会が少しずつ増えているようだ。そんなオーケストラ・コンサートのひとつを聴きに行った友人がSNSでその雰囲気や興奮気味に伝えていた。すばらしい演奏で、いったん退場した団員たちが、いつまでも鳴りやまない拍手に応じて、ふたたび舞台に戻ってきたのだという。演奏家と聴衆が、息苦しい日々のなかで連帯を再確認した瞬間。

人はパンのみにて生きるにあらず――。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者。写真も筆者）

【編集部】お蔭さまで、今月号も充実した紙面をお届けできます。みなさんご寄稿ありがとうございました。——というわけで、連載「バツハ・カンタータの場景」は、再び繰り延べます。来年の第121回定期演奏会（創立60周年記念公演、2022年5月14日、杉並公会堂大ホール）の曲目（BWV21、1、147）を紹介する予定。いずれも人気の名曲ぞろいです。その舞台の出演者を募集中です。練習は、荻窪教会で10月9日（土）から。お問合せください。

## シューベルトの青春、バッハの全人性

大村 恵美子（主宰者）

この夏中の長い在宅期間を、皆様はどのようにお過ごしだったでしょうか？ 私といえば、もっけの幸いと、家にこもって、J. S. バッハの全カンタータ作品と取り組んで、1日中訳詞を清書していました。

もう大分前に、約200曲のカンタータを全部日本語に訳し終えて、新バッハ全集の大きく重い楽譜に、手書きで書きこんだのですが、これでは、誰も読んでくれるわけがないので、将来、何とか演奏者用の日本語版楽譜として出版出来るのでは、と考えて、その底本となるはずのブライトコプフ版ピアノヴォーカル譜に、また書きうつして、毎日作業しているのです。私の訳詞を載せた楽譜は、ドイツのブライトコプフ・アンド・ヘルテル社の著作権提供をうけて、すでに80曲ほどが、合唱団の出版物として上梓されていますが、いまだ110数曲の教会カンタータが未発行で残されています。途方もない厩大な仕事なのですが、そう思っているうちに、すでに100曲近くも写し終えたところで、案外、訳詞原稿の清書作業の完成は間近（今年中？）かも知れません。

大村恵美子・個人完訳『バッハ・カンタータ日本語版楽譜全集』（全193曲）の10年後完結を目標に、目下ドイツの底本版元と残り全曲の翻訳権交渉を続けています。従来のはずれを越えた広いPR効果と資金調達の可能性とをあわせて期待して、クラウドファンディングのプラットフォームの助力を得ることとしました。近日中に計画公表に至るべく準備を進めています。ご期待ください（健）。

コロナ禍で外出自粛中の世の中とはいえ、とてもマメな相棒の家事全般の大活躍のおかげで、私は座業ほとんどの生活で、脚がむくんで困っています。「塩分控えた食事、そしてよく歩け」のお医者のご忠告は、全く「歩け」の不実行で、こんな結果なのです。でも、一時期を過ぎれば終わるので、ダラダラ続けるよりも、なるべく早くこの状態を終わらせようと、それで急いでいるわけです。

さて、私も人並みに、ごく若い頃に、シューベルトの歌に凝ったことがありました。その後、バッハのカンタータと正面きって向き合ううちに、よい意味でも、限定的な意味でも、シューベルトの歌は、やはり“青春”なのだなと、納得するようになりました。最近、何かの機会に、シューベルトを思い出すことになって、「冬の旅」なんか、懐かしいなど、そしてバッハのように日本語訳を試みたら、どんなになるのだろうと、軽い好奇心から、「冬の旅」歌曲集の第1曲〈おやすみ〉を、一晩で訳してみました。それをまた偶然のチャンスで、合唱団員の室田千晶さんに見せたのですが、彼女は何でもスピーディに実現させる方なので、すぐ〈おやすみ〉の楽譜に大村訳の歌詞を乗せたものを作譜ソフトで作成し、そのコピーをくださいました。「別に、シューベルトの『冬の旅』を全曲訳す気はないのよ」と言うと、「残念ですね」と笑っていました。

私は第1曲を訳して、やはり、高校生の時など、かじり初めのドイツ語で発音しながら、高級感でわくわくしながら、内容理解は通りいっぺんでしかなかったと思います。シューベルトを見捨てるのではありませんが、バッハのカンタータに分け入って来ると、「ああ、〈おやすみ〉など、若い人間のひた向きさで、また抱きしめたいような魅力なんだな」とうなずけるのです。

シューベルト対バッハ……、と話を進める気はなく、現在の時点で、ただの思いつきで〈おやすみ〉を日本語にしてみた、というだけのなりゆきで、バッハづくめのところに、ちょっと異なる興味をご披露する気になりました。楽譜も入れるとスペースが大きくなるので、自作の訳詞だけをご紹介しますので、シューベルトの「ふし」をつけて、歌ってみてくだされば、ご一興かと思ひ、ご紹介させていただきます。

シューベルト  
歌曲集「冬の旅」から 〈おやすみ〉  
大村恵美子 訳詞（2021/9/21 改稿）

- |  |   |
|--|---|
| 1.<br>なじみの 住みかを<br>はや 去りゆく<br>花に かこまれ<br>五月の 日々<br>君は 愛を語り<br>母 うなずく<br>今や さま変り<br>道も 白雪(しらゆき)   | 3.<br>長き 旅路を<br>いかに 過ごさん<br>道 迷いし 犬<br>吠え 鳴きゆく<br>恋は さまよい<br>うつりゆく / (君よ さらば)<br>あれか これかと<br>神の 気まま |
| 2.<br>われは 旅立つ<br>これぞ わが道<br>暗き夜(よ)の さなか<br>歩みいださん<br>みちびく 月影<br>われを 照らし<br>白き 荒野(あれの)に<br>足 踏み込む | 4.<br>なが夢 こわすな<br>眠りに 憩わん<br>足音 しのばせ<br>戸口へ 寄り<br>書きつけ 残そう<br>「おやすみ」と<br>君は 知るはず<br>わが思いを           |